つながりが
未来をつくる

令和6年度 地域福祉活動事例集

ふだんの
くらしの
しあわせを求めて

社会福祉法人 長崎市社会福祉協議会

TEL 095-828-1281
HP https://nagasakishi-shakyou.or.jp/

はじめに

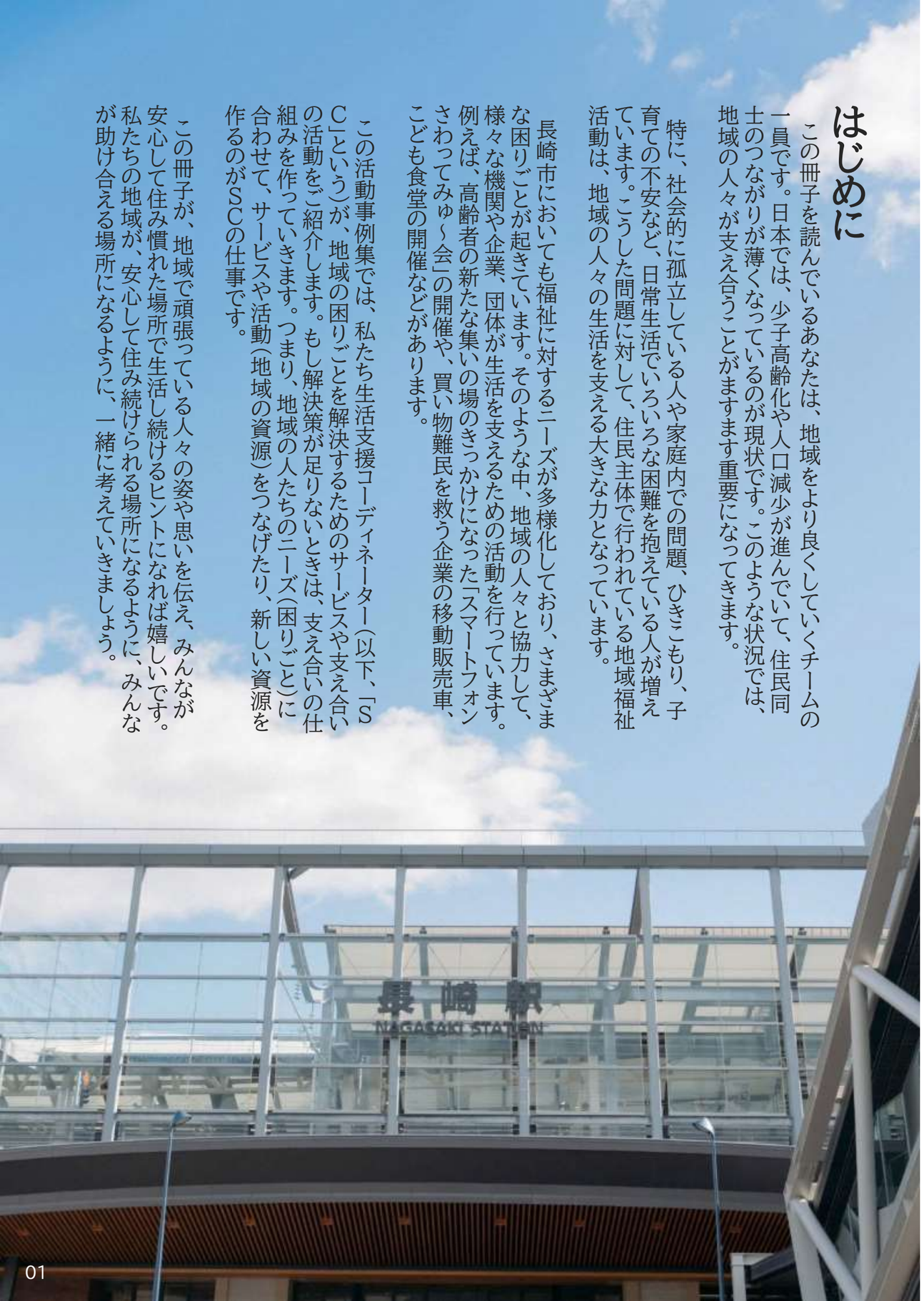
この冊子を読んでいるあなたは、地域をより良くしていくチームの一員です。日本では、少子高齢化や人口減少が進んでいて、住民同士のつながりが薄くなっているのが現状です。このような状況では、地域の人々が支え合うことがますます重要になってきます。

特に、社会的に孤立している人や家庭内での問題、ひきこもり、子育ての不安など、日常生活でいろいろな困難を抱えている人が増えています。こうした問題に対して、住民主体で行われている地域福祉活動は、地域の人々の生活を支える大きな力となっています。

長崎市においても福祉に対するニーズが多様化しており、さまざまな困りごとが起きています。そのような中、地域の人々と協力して、様々な機関や企業、団体が生活を支えるための活動を行っています。例えば、高齢者の新たな集いの場のきっかけになった「スマートフォンさわってみゅ～会」の開催や、買い物難民を救う企業の移動販売車、こども食堂の開催などがあります。

この活動事例集では、私たち生活支援コーディネーター（以下、「SC」という）が、地域の困りごとを解決するためのサービスや支え合いの活動をご紹介します。もし解決策が足りないときは、支え合いの仕組みを作っていきます。つまり、地域の人たちのニーズ（困りごと）に合わせて、サービスや活動（地域の資源）をつなげたり、新しい資源を作るのがSCの仕事です。

この冊子が、地域で頑張っている人々の姿や思いを伝え、みんながが安心して住み慣れた場所で生活し続けるヒントになれば嬉しいです。私たちの地域が、安心して住み続けられる場所になるように、みんなが助け合える場所になるように、一緒に考えていきましょう。



INDEX
目次

01＿ はじめに

02＿ スマホってよかばい！
～高齢者でもスマホは使ってみると面白い!!～

05＿ 坂の街長崎市で買物困難とどう向き合う？
～買い物支援に取り組む企業連携の事例 ～

08＿ 社協では地コミとの連携を進めています！
～買い物支援に取り組む企業連携の事例 ～

11＿ こども食堂 × ○○
～多様性とつながる活動～

13＿ NEW 高齢者ふれあいサロン紹介

14＿ 気負わず、それとなく見守る
～晴海台ささえあいネットワーク～

スマホってよかばい！

～スマホは使ってみると面白い!!～

桶屋町スマホさわってみゅ～会にて
住民同士でスマホの使い方を学び合う様子

長崎市社協が後押しする高齢者のデジタル推進

長崎市社協はなぜスマホさわってみゅ～会を後押ししているの？

日本では、2025年にいわゆる「団塊の世代」が75歳を迎えます。高齢化が進む中で、地域での交流活動が要介護状態への予防になると厚生労働省が提言しています。実際に地域活動に参加している多くの方が、活動に参加していない時と比べて生活が充実していると話されています。

これまで、集いの場に来られなかった方が、スマホを学ぶという機会をきっかけに他者とつながり、生活をより充実したものにしてほしいとの思いから、スマホの使い方を学ぶ場づくりを後押ししています。

生活支援コーディネーターの役割

私たちは、地域の中で日常生活における「あったらよかね」の実現をお手伝いしてます。

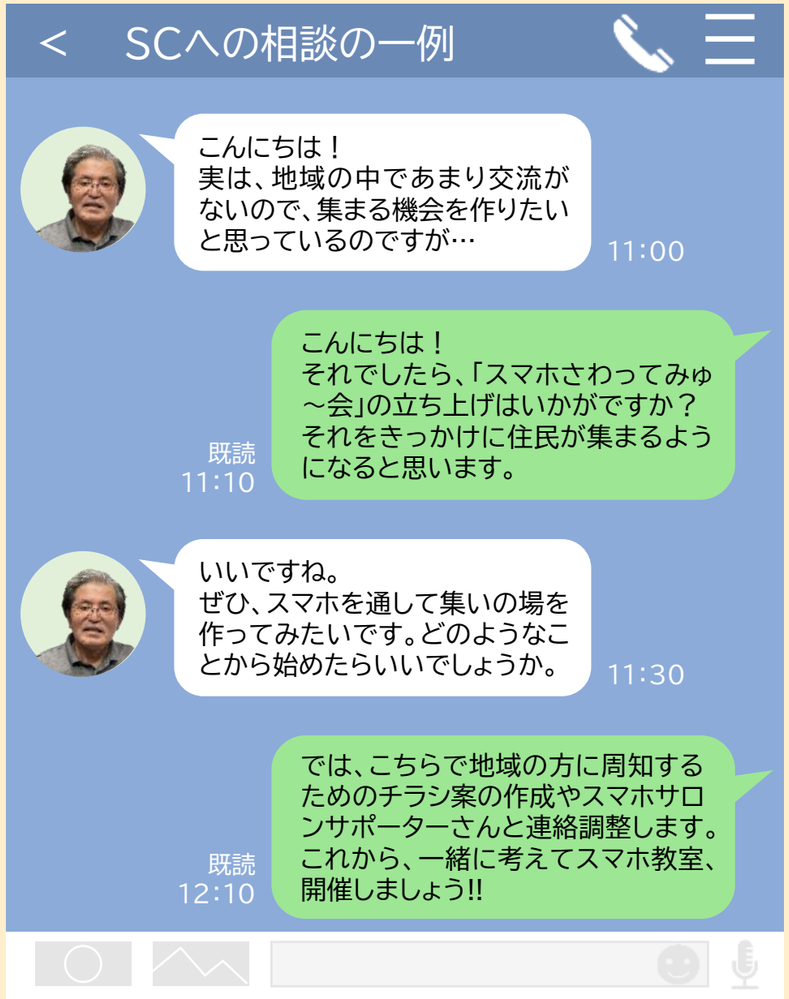
今回は、地域から「集いの場を作りたい」とお話を伺ったので、スマホさわってみゅ～会を通して集いの場ができるように継続的にサポートしております。

気軽にご相談ください

社協が提案するスマホさわってみゅ～会とは?

スマホの利用に馴染みのない方にとって、使い方を教えてくれる身近な相談相手が求められています。そこで、社協では、長崎市が養成したスマホサロンサポーターの協力を得て、高齢者同士がスマホを学び合う場「スマホさわってみゅ～会」の立ち上げを進めています。

今回は桶屋町の事例を参考に、地域の民生委員・児童委員と社協の生活支援コーディネーターがスマホさわってみゅ～会を立ち上げるまでの経緯を紹介します。



スマホの悩みを助けるスマホサロンサポーターとは？

スマホの操作に不慣れな高齢者に対して、基本的な操作方法の相談に対応するために、長崎市が養成したサポーターです。シルバー世代のサポーターが対応するため、身近で安心感のある相談が可能です。

スマホサロンサポーターと社協が連携することで、多くの高齢者が安心してスマホを利用できる環境づくりを目指しています。

高齢者のスマホ普及に取り組む皆さんのご紹介！

1 長崎ケーブルメディア

前半に講座形式でスマホの使い方の説明を行い、後半はスタッフに参加者のスマホのお困りごとを個別に応えていただいています。スタッフが、グループLINEの作成を1から手順を追って親切に説明していました。参加者からは「これで気軽に連絡がとれるわ」と喜びの声をいただいています。

SCも一緒にスマホを教えています

2 まごころサポート

短時間からお手頃価格で、シニアの困りごとのお手伝いをされているまごころサポートさん。高齢者サロンにおけるスマホ教室の実施に協力していただいています。参加者の要望に応じて、初歩的なことからメルカリやGoogle検索、LINEなどの使い方を優しく説明されています。

皆さんのお悩みを根気よく説明します

まごころサポート
鈴木秀規 さん

オンライン井戸端会議の様子

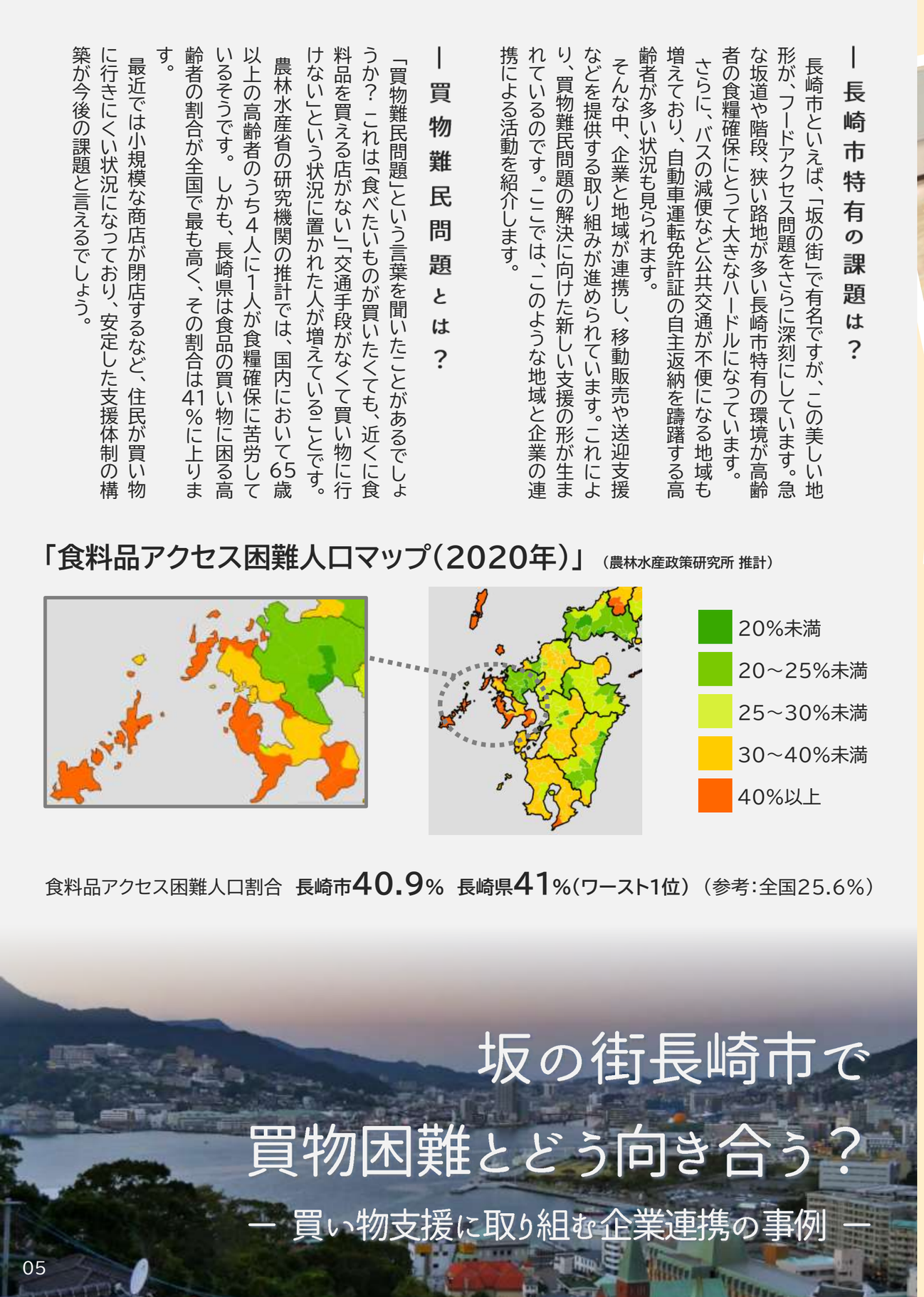
3 光風台スマホ教室

三重地区で活動されている「光風台教室」では、講師の篠原さん（78歳）が「高齢者もスマホを使える環境を整えていきたい。」という思いで、高齢者の立場で高齢者に特化したスマホ教室を目指されています。また、Web会議システムを使った意見交換の場である「オンライン井戸端会議」を開催されています。気軽に参加が出来るということで、参加者の皆さんに好評です。

4 スマホドクター

スマホを使うことで高齢者の余暇活動が少しでも楽しく、充実したものになって欲しいとの思いから、スマホ教室を実施されています。1対1のお付き合いを大切にしながら、少人数の方に対して、マンツーマンで対応しているのが特徴です。

スマホドクター
堀田敏郎 さん



坂の街長崎市で買物困難とどう向き合う？

― 買い物支援に取り組む企業連携の事例 ―

― 長崎市特有の課題は？

長崎市といえば、「坂の街」で有名ですが、この美しい地形が、フードアクセス問題をさらに深刻にしています。急な坂道や階段、狭い路地が多い長崎市特有の環境が高齢者の食糧確保にとって大きなハードルになっています。

さらに、バスの減便など公共交通が不便になる地域も増えており、自動車運転免許証の自主返納を躊躇する高齢者が多い状況も見られます。

そんな中、企業と地域が連携し、移動販売や送迎支援などを提供する取り組みが進められています。これにより、買物難民問題の解決に向けた新しい支援の形が生まれているのです。ここでは、このような地域と企業の連携による活動を紹介します。

― 買物難民問題とは？

「買物難民問題」という言葉を聞いたことがあるでしょうか？ これは「食べたいものが買いたくても、近くに食料品を買える店がない」「交通手段がなくて買い物に行けない」という状況に置かれた人が増えていることです。

農林水産省の研究機関の推計では、国内において65歳以上の高齢者のうち4人に1人が食糧確保に苦労しているそうです。しかも、長崎県は食品の買い物に困る高齢者の割合が全国で最も高く、その割合は41％に上ります。

最近では小規模な商店が閉店するなど、住民が買い物に行きにくい状況になっており、安定した支援体制の構築が今後の課題と言えるでしょう。

「食料品アクセス困難人口マップ（2020年）」（農林水産政策研究所 推計）

食料品アクセス困難人口割合　長崎市40.9％　長崎県41％（ワースト1位）（参考：全国25.6％）

毎週月曜日と金曜日になると移動販売車が地区内を周ります。多くの方が集まり、住民同士の交流の場になっています。

1 小榊連合自治会

－エレナ・ララコープ・セブンイレブン－

スーパーの閉店に伴い、連合自治会が動き出しました。

令和6年2月末、地区内唯一のスーパーが閉店することが決まり、住民の間には不安が広がっていました。特に高齢者は、買い物ができなくなることへの心配が大きかったようです。

その中、小榊連合自治会の中村泰輔会長は、地域住民の生活を支えるため、買い物手段の確保に向けてすぐに行動を開始。令和5年12月には住民向けアンケートを実施し、買い物に困っている人々の実態を明らかにされました。

特に、スーパーがなくなることで不便を感じる住民の状況を細かく把握され、解決に向けて動き始められました。

連合自治会は企業に協力を依頼し、その結果、令和6年6月からエレナの移動販売、ララコープの買い物送迎サービスが開始。さらに7月からはセブンイレブンの移動販売も始まりました。

これにより、住民たちは安心して暮らせる環境が整いました。

とくし丸が来たことを呼びかける音楽が聞こえると、周りの住民が集まってきます。田崎会長が「元気しとるね？」と声をかけて、住民同士の会話が弾みます。

2 西北第二自治会

－㈱東美・とくし丸－

坂道での買い物に困っている住民の相談が、西北第二自治の田崎光男会長を通じて社協の生活支援コーディネーター（以下、SC）に寄せられました。

話を詳しく聞くと、バス停から自宅までの道が急な坂になっており、特に重い荷物を持って帰るのが大変だということが分かりました。

この相談を受けたSCは、移動販売車を誘致することを提案。田崎会長は、自治会の広報紙を通じて住民に移動販売車が必要かどうかを問いかけました。その後、住民からの声を元に、販売車が停車する場所を選定。そしてSCは（株）東美と交渉し、移動販売車「とくし丸」のルートに追加してもらうことが出来ました。

令和6年8月から、ついに移動販売がスタートし、買い物をした住民からは「これまではタクシーでお金をかけて買い物に行っていたけど、これからは家の近くで買えるから本当に助かるし、便利になった。」と、嬉しさを語られていました。

参加者は「普段、病院でしか会えない人とも会えるからこの買い物を楽しみにしていた」と笑顔で話されました。

3 伊王島地区高齢者見守りネットワーク協議会

－i+Land nagasaki－

伊王島地区高齢者見守りネットワーク協議会では、75歳以上で生活の上で見守りが必要な方々を地域住民でネットワークを組んで見守っています。

高齢者見守りネットワーク協議会の定例会に、伊王島にあるアイランドナガサキが参加されて、「何か地域の高齢者の方へ支援することはないか？」と提案を受けたことが買い物支援のきっかけでした。

アイランドナガサキが運行するバスが、伊王島ターミナルから各地区のバス停を回り、ジョイフルサン江川店までの送迎を行われます。

送迎支援を行うアイランドナガサキに加え、送迎先のジョイフルサン江川店にも協力をいただき、帰りの際には店員さんが見送りまでしてくださっていました。

買い物する利用者は、お店に生鮮食品だけではなく衣料品、日用品等、何でも揃っていることに満足されていました。「たくさんの種類から自分で選べるのは嬉しい」と笑顔で話されていました。

ご近所をはじめ、グラウンドゴルフで身体を動かした後の高齢者も買い物を楽しまれています。晩ご飯の献立を話し合いながら、商品の品定めをされています。

4 古賀地区まちづくり協議会

－イオン東長崎店－

古賀地区では、イオン東長崎店による移動販売が令和5年11月から開始しました。以前から古賀地区では、買い物に困難を抱える住民が多いという課題を抱えていました。その中で、古賀地区まちづくり協議会の高齢者福祉部会では、買い物支援活動の先進地へ視察に行き、その後、地域のニーズを把握するために住民調査を実施されました。

そのような中でイオン東長崎店が移動販売を始めようとしている情報を把握し、古賀地区で移動販売を実現するためにまちづくり協議会が動き出しました。地元の方々との話し合い、買い物支援のニーズが高い地区を中心にルートを策定されました。

現在、古賀地区の移動販売は多くの住民の助けになるとともに、地域住民の新たな集いの場としての役割や、安否確認の一助となっています。

このように移動販売が人と地域をつなぐ架け橋となり、「いつまでも住み続けたい」と思える地域づくりの一翼を担っています。

社協では地コミとの連携を進めています！

長崎市内では、住みよいまちづくりを目指して、おおむね小学校区ごとに地域コミュニティ連絡協議会（通称「地コミ」）が組織されています。ここでは、社協が地コミと連携して活動した事例を紹介します。

川平地区 まちづくり協議会
～移動販売車を地域に！～

川平地区は、山や川に囲まれた自然豊かな場所です。地区内の自治会同士も仲が良く、地域活動も活発です。その反面、地域の高齢化が進み、独居高齢者が増えている現状です。また、坂の上に家があったり、バス停から家が遠いなどの課題を抱えています。

この記事では、住民の生活支援ニーズに対し、地域がどのような機関・企業と連携し、対応していったのかご紹介します。

ステップ1 自治会長からの相談

地コミ副会長 松本 幸一さん

買い物する場所が遠くて、地域住民が困っとっとよ。どがんかならんやろか？

生活支援コーディネーター

移動販売を呼びませんか？私が協力してくれる企業を探します！その前に、どのくらい利用する人がいるのかをアンケートで調べませんか？

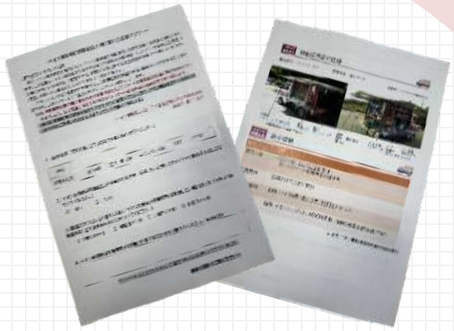
移動販売をしている企業をリサーチ！併わせて、SCがアンケート用紙を作成し、地コミと協力して地域の皆さんへ向けたアンケート調査を準備しました！

POINT

地域コミュニティ連絡協議会とは？

地域の様々な団体（自治会、青少年育成協議会、社会福祉協議会支部、PTAなど）が連携し、地域の課題を話し合い、解決策を実行するための組織です。

ステップ2 アンケートの実施



移動販売をしている企業と川平地区の5自治会役員を交えた説明会を実施！

ステップ3 巡回ルートの検討

地コミ会長 野口保久さん

次はルートば考えんばね…

停車場所の写真を撮って企業に提案しましょう！

地コミ副会長とSCで実際に地域を車で回り、写真を取りながら資料を作成しました！

調査の結果…

多くの住民から移動販売を「利用したい！」という声が寄せられました。

利用したい！

あったらよかね～

使いたい！

ステップ4 協力企業との調整

アンケート結果とルート案を企業に説明

イオン東長崎店 本田店長

ここまで事前に準備していただいたのは初めてですぜひ、協力させて下さい！

最終ステップ 移動販売の開始

社協では地コミへ こんな支援にも取り組んでいます！

高齢者のお買い物をもっと気軽にしたい！
-尾戸まちづくり協議会-

琴海尾戸地区では、バスの便数が少ないため、車を持たない住民が気軽に買い物に行くことが難しくなっています。

この問題に対して、まちづくり協議会は、形上保育園からマイクロバスを借りて、月に2回の買い物支援活動を展開しています。

この取り組みは、令和6年1月に試験的にスタートし、当初は社協が利用者アンケートの協力を行いました。

住民の声を活かして進められているこの活動は、移動手段が限られた高齢者などにとって、貴重な支援となっています。

利用者へ社協職員がアンケートの聞き取り

地域の絆を深め、買い物が困難な状況を解消するこの活動が、今後も持続的に発展していくことが期待されます。

もしものときのために・・・防災への取り組み
-西北校区まちづくり協議会-

西北校区まちづくり協議会の暮らしづくり部会では、地域住民の防災意識を高めるために、「西北自主防災組織」を設立し、自主避難所の開設や災害時対応に関する周知活動を推進しています。

社協では、この部会に対する研修支援を行い、災害に強い街づくりをサポートしています。

例えば、能登半島地震の被災地に派遣された職員が、現地の状況を踏まえた報告を行い、そこで得た教訓をベースにした防災講義を行いました。

また、炊き出し訓練では、災害時に少ない飲料水でも効率的に炊飯できる「パッククッキング」の技術指導を行うなど、具体的な防災スキルの普及にも力を入れています。

パッククッキングをみんなで体験

高齢者に優しい街へ 祭りで認知症声掛け訓練
-伊良林まちづくり協議会-

伊良林校区まつりでは、地域の子どもたちに、福祉活動への関心を持ってもらうため楽しく学べる機会も提供しています。

今年は社協と桜馬場地域包括支援センターが協働で「高齢者徘徊模擬訓練」のブースを出店しました。ブースには多くの親子連れや兄弟が訪れ、会場内にいる徘徊役スタッフの写真を見ながら探し、優しく声掛けをする練習ができました。

認知症高齢者の一人歩き事例が増えている中、子どもの頃から認知症への理解を深め、地域の方が認知症になっても安心して住み続けられる街になるよう協力させていただきました。

こども食堂×○○ ～多様性とつながる活動～

2023年、NPO法人「全国こども食堂支援センター・むすびえ」の調査で、全国のこども食堂数は過去最多の9132カ所に達しましたが、長崎県は48カ所と依然として少ない状況です。その中でも長崎市内で地域と連携し、独自の取り組みを進めるこども食堂が存在します。

今回の記事では、企業や関係団体と協力し、地域の多様な課題に挑む活動を紹介し、どのように地域の未来を支えているかをお伝えします。

① こども食堂×障害者支援 ～ 福田こども食堂 ～

こども食堂を運営する上で、食材の確保は大きな課題の一つですが、少しずつ協力する企業が増えつつあります。

福田こども食堂では、「コルディアーレ農園」との連携が活動を大きく支えています。農園からは毎月、新鮮な無農薬レタスが提供され、この取り組みは食材提供だけでなく、障がい者の就労支援も兼ねています。農園で栽培されたレタスが障がい者の働く現場からこども食堂へと届けられ、地域社会への貢献が二重の意味を持っています。

いただく野菜に、折り紙の飾り付けが毎回一緒についているのですが、そんなちょっとした思いやりが嬉しいですね。頂いた折り紙は、参加者に差し上げると喜ばれています。

農園さんとの連携が、子どもにとって障がいのある方とのつながりを感じる場になればと思っています。

福田こども食堂
黒田唯介さん

コルディアーレ農園
宮崎 健二 さん

地域に新鮮な食材を提供しながら、障がいを持つ方々の就労支援にも貢献できることが非常に嬉しいです。地域のためになっていることが、働いている方のモチベーションにもなっています。

今後も地域との連携を深め、継続して支援していきたいです。

コルディアーレ農園（株式会社JSH）は、一般就労を希望される障がい者と、大手企業のマッチングをしながら、九州を中心に複数の農園を運営されています。

福田地区の農園は令和5年10月に開設され、障がい者を中心に野菜の水耕栽培をされています。

農園で栽培された野菜は雇用主の大手企業が利活用するだけではなく、一部は地域の保育園や福祉活動団体へ寄付されています。今後も地域のための活用を検討していきたいそうです。

② こども食堂×お寺　～ 矢上みんな食堂 ～

矢上地区みんな食堂ではお寺を一つの居場所にして、こどもから高齢者まで世代を超えた交流をしています。

矢上地区みんな食堂代表の小岱（しょうだい）さんは、当初、こども食堂の立ち上げを考えていたそうです。しかし、コロナ禍に様々な孤独や孤立が広がっている現状を知り、多世代を対象にしたみんな食堂として立ち上がりました。

食堂を開催する日は、会場となる教宗寺門徒会館に多くの子どもや高齢者が集まります。台所では子どもも一緒に地域の方々が中心となり、手作りの食事を作ります。参加者はツイストバルーンや折り紙などを通して多世代交流を深めていました。

季節を感じる食事を世代を問わずに皆で楽しむ様子は、地域のつながりを感じる素晴らしいものでした。

矢上（しょうだい）みんな食堂
小岱（しょうだい）　海　さん

みんな食堂を通して、貧困対策だけではなく、参加者に文化的な体験をしてもらいたいと思っています。

ある参加者が、「普段は季節を感じられる食事をしない。」と話されていました。季節感のある食事を提供することも、大事な文化体験になると思い提供しています。

③ こども食堂×環境学習　～ NPOながさき村 ～

NPO法人ながさき村は、最近の食料費高騰によって経済的に困っている子育て世帯への支援を行っています。

具体的には、こども食堂やこども宅食、食材の配布などを通じて、地域の子どもたちの健全な成長をサポートしています。

また、こどもたちがくつろげる場所を提供するため、家や学校ではない、第三の居場所として「森と海と子どもの家」を開設しています。この活動では、スタッフとの遊びの中で日常的な遊びや体を動かしたりするほか、夕食を一緒に作ります。月末には、自然豊かな場所での野外活動も併せて行い、講師から自然について学んだり、野菜の収穫をして直接料理に利用したりします。

講師の山田さんは「こどもたちが自然に触れることで生き物の循環や生態系の仕組みを知り、地域の助け合いの精神を育んでいきたい。」と語っておられました。

また、法人の代表である峰さんは「私たちは子どもたちの居場所づくりやひとり親家庭の体験格差の解消を目指して様々な活動を行っています。これからも多くの子どもたちが体験を通して、健やかな成長が出来るようなお手伝いをしていきたいです。」と述べておられました。

NEW

令和6年度

高齢者ふれあいサロン紹介

※今年度、新しく立ち上がった社協型サロンを紹介します

① サロン名
② 活動場所・活動日
③ ウチのサロンの自慢
④ 皆さんに一言

① ひこさん会
② 矢の平公民館・第4水曜日（14:00～15:30）
③ みんな明るく、話好き、いろんなことに興味があります。頭を使った体操も楽しんでます。
④ たのしい活動なので皆さん大歓迎！年齢問わず、友達を誘って来て下さい。

① 船津わいわい会
② 網場地区長崎市消防団第31分団4部・第2火曜日（13:30～15:00）
③ 男性の参加者が多く、幅広い年代が参加しており、誰でも気軽に参加出来る雰囲気です。
④ このサロンのために外に出たいと思えるような活動にできるように工夫をしています。

① ふれ愛サロンいってみよう会
② つつじヶ丘1・2丁目自治会集会所・第3木曜日（13:30～15:30）
③ 同年代だからこそ分かり合える、日ごろのお悩みを気軽に相談できる雰囲気があります。
④ 月1回のサロンなので気軽に参加してほしいです。出前講座を積極的に取り入れてます。心も体も元気になりましょう。

① ふれあいサロン「こだんはら」
② 南が丘南八景公民館・第1水曜日（10:00～11:30）
③ 5町が集まり、特に男性の参加が多いところ。
④ これからも楽しいイベントを計画中！たくさんの参加をお待ちしています。

① 犬継サロン
② 犬継公民館・第1水・第3土曜日（13:30～15:00）
③ 三ツ山クルスの里　ホタルが舞う　自然豊かなサロン
④ 高齢化率77%だけど、老若男女いつまでも元気でもっともっとつながりたい！

① いどばた☆パーク
② 西城山交流センター・第1・3火曜日（10:00～11:30）
③ みんなが明るいので楽しくなる
④ 年配の方が元気で生きる目標になっています。よか人ばっかりいるサロンですよ！

Harumidai Sasae "eye" Network

気負わず、それとなく見守る

～晴海台ささえあいネットワーク～

長崎市晴海台地区は長崎市の南部に位置し、世帯数は1193世帯、人口2671名、高齢化率が約41％です。（令和5年度現在）

美しい自然と歴史的な魅力が融合する素敵なエリアで、長崎港や周囲の島々を一望できるため、海に面した絶景ポイントとしても知られています。

地区内では、高齢者ふれあいサロンなどの地域活動に、多くの住民が参加して、日頃から地域活動が盛んに行われています。それらの地域福祉活動として「晴海台ささえあいネットワーク」があります。

この活動は、「みんなで見守りあいながら、地域で暮らしていきたい」という住民の思いが原動力になっています。月に一回の定例会では、ささえあいネットワークの仲間たちが、高齢者サロンの前後に情報交換や悩み相談、気軽な雑談などを行っています。

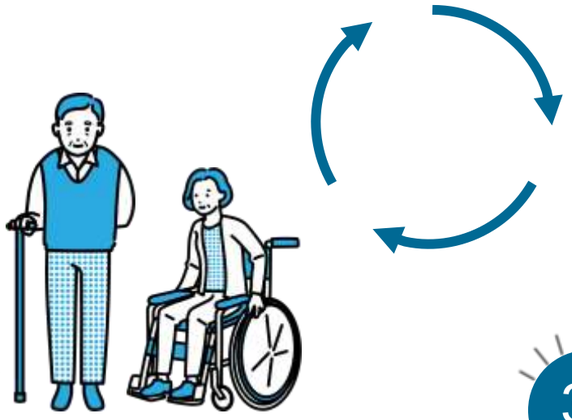
ここでは、晴海台地区で活動しているささえあいネットワーク活動の様子や仕組みと、担い手の実体験を伺った対談形式のインタビューをご紹介します。

晴海台ささえあいネットワークの活動

友愛訪問を超えて、繋がりの輪を広げてく

「ささえあいネットワーク」とは

地域の中の見守りが必要な世帯が地域において誰もが安心して暮らせるように、要支援者（高齢者、障がい者及びひとり親家庭等）の見守りや、日常生活支援（声掛け等）など地域住民が暮らしやすく過ごせるための活動です。



1 地域での見守り

ネットワークのメンバーが地域に住む高齢者などを、できる範囲で声掛けや見守ります。

2 気軽な生活支援

対象者の悩みを聞く中で、メンバーが対応できる範囲での支援を行います。

3 ネットワーク会議

見守りをする中で、対象者の気になることや支援した内容を共有します。

ささえあいネットワーク Q&A

「生活支援」とは？

「ゴミ出しに代わりに行ってほしいな～」「電球の交換をしたいけど、椅子に上がるのは大変。」 そのような困りごとを解決するために、ネットワークのメンバーが対応できる範囲で家事などのお手伝いをします。

地域の住民がお互いに出来る範囲での支え合い活動を行っています。

なんで、情報共有を行うの？

地域で複数の支援者でチームを組むことは、気づきの目を増やすことに繋がります。気づきの目が増えることによって不安や心配を抱える住民の存在を早期に発見することに繋がります。

また、支え手の負担感を減らし、継続的な活動につながっています。

つながりが未来をつくる

－ 令和6年度 地域福祉活動事例集 －

発　行：令和6年11月

発行元：社会福祉法人　長崎市社会福祉協議会
地域福祉課　地域福祉係
〒850-0056
長崎市恵美須町4番5号NBC3rdビル3F
TEL 095-828-1281 FAX 095-828-7236

対談インタビュー

小柳 幸一郎 さん
（晴海台まちづくり協議会会長）
×
福田 忠正 さん
（社協晴海台支部支部長）

今回、晴海台ささえあいネットワークを発起人である小柳さんと、現在の代表の福田さんにネットワーク活動の実際を伺いました。

SC－活動のきっかけは何ですか？

小柳－妄想癖を持つ人がいてね、自分は毎日、訪問していたよ。それも朝早く夜遅く、電話がかかってきて、夜9時に隣の家の赤ん坊が泣いていると言っていた。「ほら、いないよ。聞こえないよ。」と否定しないことを心掛けて話しを聞いていたね。

SC－毎日訪問とはすごいですね。

小柳－その方の家が丸2日、一階から二階まで明かりがついたままになっていたことがあってね。どうしたもんかなあと思って、すぐに向かったところ、台所と居間のところで倒れていて、大腿骨が骨折して丸2日間動けない状態だったんだ。寒い冬の中、暖房もない。その時は死ぬばかりと思っていたと話されていたよ。

SC－それは忘れられないですね。その方が小柳さんと繋がっていたから良かったです。

小柳－たまたま見つけて、動けなかった人が助かったと思うと同時に、他にも見守りが必要な方がいるんじゃないかと思ったね。

SC－そこで他の民生委員・児童委員にも声をかけたんですか？

小柳－そうそう。数人の民生委員・児童委員だけでは対応できないと思って、地域の見守り体制をつくろうと、ささえあいネットワークを立ち上げたんだ。

SC－すごいですね。ネットワークでの活動はどれくらいされているのですか？

小柳－年間で延べ1800件くらい訪問して、買い物やごみ出しなど対象者ができないことをご支援し、地域の方々に喜んでいただいてます。すごい件数をみんなが訪問してくれて、買い物に連れて行ったり、サロンへ送迎したりと、日常的な些細な手伝いをしているかな。

福田－みんなね、献身的に動いて下さるんですよ。手づくりのおいなりさんやちらし寿司を近所に配ったりしている人もいるみたい。

SC－他にはにどんな活動をされているのですか。

福田－パソコンの得意な人を呼んでパソコンの設定やアドレスを探すところから一緒にしたなあ。最初はその人も耳が遠かったから、何回も家にあがっていたら、「最初からもう家にあがっておいで。」と呼ばれるようになったんだ。しょっちゅう家に行くことがあったから信頼関係を築くことに繋がったかもなあ。

小柳－高齢者の方はできないことが多く、困っていることも多いからね。例えば、電球を換えるときも、椅子に登れないから、玄関とか台所などにあがって助けてあげているよ。ごみ出しも同様だね。

SC－声に出すことができない人も多いなか、助けを求めることができるのはお二人への信頼があってのことですね。

福田さんは、活動するうえでどんなことを意識しておられますか？

福田－自分の担当の地区は訪問しているから大体の状況は分かるけど、定例会で他地区のメンバーから気になる対象者の報告があれば、声かけの対象に含めるようにしているよ。

SC－地域の状況は日々変化していきますもんね。

福田－あとね、気軽に何度も訪問していたら「福田さん、家の中にあがらんね。コーヒーをあげるよ。」と言ってもらい、手術を控えていたその対象者が、「自分は福田さんより元気になって帰ってくるけんね。」と話してくれた。その後も、「自然とあの方はどうなっているかなあ。」と気になってしまう。自然に常に寄り添うようになっているかな。

SC－そのような寄り添いの姿勢が、住民同士での支え合う地域づくりにつながっているのでしょうね。

福田さん

小柳さん